

世間解

第四一八号

令和四年十二月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

ーいまにいたるまでー

有縁皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏ご相続のことと存じます。十二月になりました。

新型コロナウイルス感染症、エビデンス、パンデミック…。なんやらわからない言葉が飛びかっから三年になろうとしています。その間も色々な災害や事故、事件が起きました。様々な縁の中で、いや、どんな事がやってくるかわからない、本当に何がやってきても不思議では無い中に私は「いのち」恵まれていることを思います。

いまにいたるまで、おもひあはせられ候ふなり。

親鸞聖人が八十八歳の十一月に関東におられるお弟子から届いた手紙にお返事としてお出しくださった御消息（お手紙）の一節であります。

「八十八歳になった今でもへ本當におっしゃってくださった通りだなあ」といってくださいますよ」という深い感慨であります。このお言葉の前半は、

故法然聖人は、「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひしことを、たしかにうけたまはり候ひしうへに、ものもおぼえぬあさましきひとびとのまゐりたるを御覧じては、「往生必定すべし」とて、笑ませたまひしを、みまゐらせ候ひき。文沙汰して、さかさかしきひとのまゐりたるをば、

「往生はいかがあらんずらん」と、たしかにうけたまはりき。というものです。いま御消息全体の内容を詳しくお聞かせいただく暇はありませんが、このお言葉はそのお手紙の結論と見てよいとあります。

へお師匠さまは「阿弥陀さまの教えに遇わせていただいた我々は“いのち”の行き先を安心して阿弥陀さまにおまかせするだけでよいのだ」と仰つていた。仏教を専門的に学ぶことの無い人たちが「阿弥陀さまにお救いいた

んですね」とお念仏しながら帰ってゆかれるのをご覧になつては「あの人は間違いなしにお浄土に生まれて往かれる方だなあ」と微笑まれているのを見ました。反対に学問ぶつた論議を振りかざす人が帰られた後には「あの人はあれでお浄土に参ることが出来るのだろうか」と仰つていたことをはっきりとお聞きしました。く

というような事でしょうか。このことを「いまにいたるまで、おもひあはせられ候ふなり」と仰るのであります。

親鸞聖人が法然聖人のお弟子になられたのが、二十九歳の時、三十五歳の時には念仏弾圧に巻き込まれてお二人は「流罪」となり、その後再びお会いになる事はかきませんでした。先ほどのお手紙は親鸞聖人八十八歳の時、法然聖人と共に「流罪」になられてから五十三年という時が経っています。

それを「いまにいたるまで、おもひあはせられ候ふなり」と、へ本當に仰つておられた通りだなあ」とかみしめておられるのであります。

親鸞聖人はそのご生涯をかけて法然聖人から聞き承けられた「阿弥陀さまのご本願によるお念仏の救い」に生き、その眞実性を確認し続けられたお方でありました。

法然聖人の教えの眞実性を確認されるということは、そのままご自身の仏道、そして念仏生活の眞実性を確認されることでもありました。

「いまにいたるまで、おもひあはせられ候ふなり」は五十年以上前にお聴きになった昔話として思いだしておられるのではなく、今現に、間違いなくこの私を育て、支え続けてくださっているお師匠さまのお声であり、お師匠さまから聞き承けられた阿弥陀さまのおはたらきなのであります。

親鸞聖人が八百年前に聞かれたお言葉がそのまま今の私たちを包み支えてくださるのであります。

法然聖人や親鸞聖人にかかってくださっていた阿弥陀さまのご本願のおはたらきと全く同じ阿弥陀さまのご本願のおはたらきが今も、これからも色々な事にあつてゆかねばならない私たち一人一人の上に同じようにかかり続けてくださるのであります。

